

錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要 I

1985

滋賀県教育委員会
滋賀県文化財保護協会

錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要 I

1985

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会



錦織道路・南滋賀道路遠景（南上空より）



錦織遺跡全景（南上空より）

序

大津北郊の地は、その地勢および地理的な位置からして、縄文時代以来今日に到るまで多くの遺跡が、途絶えることなく、しかも密度高く分布する地域であります。このため、市民の方々の御理解により、住宅の建て替えなどに先立って、発掘調査を実施してきたところであります。本書は、そのうち昭和59年度の成果を収載したものであります。本書が文化財の保存と普及に活用されることを願うものであります。

昭和61年3月

滋賀県教育委員会
教育長 南 光雄

例　　言

1. 本書は国庫補助事業に伴う錦織・南滋賀遺跡の発掘調査概要で、昭和59年度に発掘調査し、昭和60年度に整理したものである。
2. 本調査は昭和60年度国宝重要文化財保存事業費国庫補助金を得て滋賀県教育委員会を調査主体とし、(財)滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、地権者細田光蔵、櫻田光一、櫻村岩吉、白子久雄の諸氏の協力を得た。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	市原 浩
課長補佐	中正輝彦
埋蔵文化財係長	林 博通
" 技師	萬野泰樹
管理係 主事	山本徳樹

(財)滋賀県文化財保護協会

理事長	南 光雄
事務局長	江波弥太郎
埋蔵文化財課長	近藤 滋
調査二係長	大橋信弥
技師	横田洋三
"	三宅 弘
嘱託	岩間信幸
嘱託	氏丸隆廣
総務課長	山下 弘
" 主事	松本暢弘
嘱託	中谷サカエ

6. 本書の執筆・編集は、大橋を中心として横田、三宅が行い、文章の末尾に執筆者名を付した。
7. 出上遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

I.	はじめに	1
II.	59-1 地点の調査	7
III.	59-2 地点の調査	12
IV.	59-3 地点の調査	26
V.	59-4 地点の調査	31
VI.	おわりに	38

第1図	位置図	1
第2図	調査地点配置図(南滋賀遺跡1)	2
第3図	調査地点配置図(錦織遺跡2)	3
第4図	調査位置図	6
第5図	トレンチ配置図(1/300)	7
第6図	トレンチ平面図・断面図	8
第7図	出土遺物実測図	9
第8図	調査位置図	10
第9図	トレンチ配置図	12
第10図	上層遺構実測図	13
第11図	下層遺構実測図	14
第12図	合わせ口壺棺出土状況図	18
第13図	遺物実測図(1)	19

第14図	遺物実測図(2).....	20
第15図	遺物実測図(3).....	21
第16図	調査位置図.....	25
第17図	トレンチ配置図.....	26
第18図	トレンチ断面図.....	26
第19図	出土遺物実測図.....	28
第20図	トレンチ全景.....	28
第21図	調査位置図.....	30
第22図	トレンチ配置図.....	31
第23図	上層遺構実測図.....	32
第24図	下層遺構実測図.....	33
第25図	トレンチ断面図.....	34

図 版

図版一	南滋賀遺跡全景	37
図版二	錦織遺跡全景	
図版三	59-1地点 調査前全景	
	59-1地点 トレンチ全景 (第一遺構面)	
図版四	59-1地点 東面壁堆積状況	
	59-1地点 出土遺物 (左・第二遺構面、右・第一遺構面)	
図版五	59-2地点 上層遺構面	
	59-2地点 下層遺構面	
図版六	59-2地点 合わせ口甕棺出土状況	
	59-2地点 合わせ口甕棺出土状況	
図版七	59-2地点 池状遺構	
図版八	59-4地点 上層遺構面	
	59-4地点 下層遺構面	
図版九	59-2地点 出土遺物	
図版十	59-2地点 出土遺物 31~49	

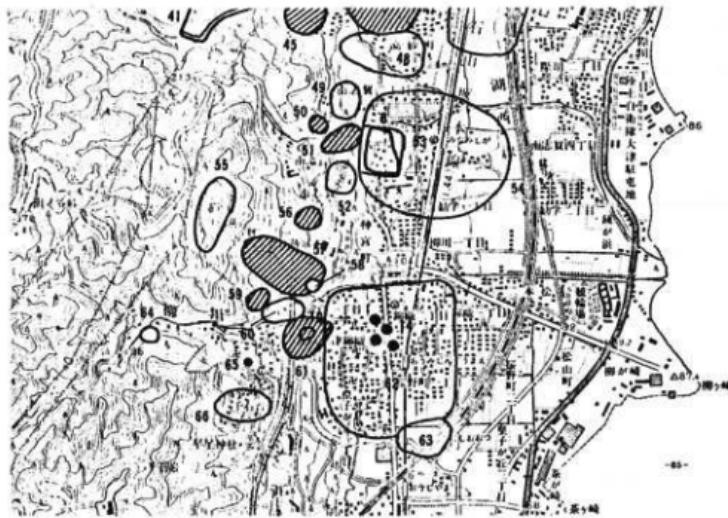
59-3 地点 出土遺物 1~5

図版上 59-2 地点 出土遺物

I. はじめに

滋賀県教育委員会では、昭和49年度における錦織遺跡御所之内地点の大規模な掘立柱建物跡の発見以来、北方の南滋賀遺跡（史跡南滋賀町廃寺跡を含む）とともに、一部大津市教育委員会の協力を得て、事前発掘調査を実施してきた。この間に錦織遺跡では、さきの掘立柱建物跡に関連する遺構が数ヶ所で検出され、昭和54年7月に、「近江大津宮錦織遺跡」として、国指定史跡となった。ただ、それらの成果については、一部を除いて未報告のまま山積するところとなっている。そこで本年度より前年度の調査概要をまとめ報告し、余力のある場合については、過去の成果についても、順次概要報告することとし、本書には、昭和59年度に実施した4ヶ所の調査概要を収載することができた。

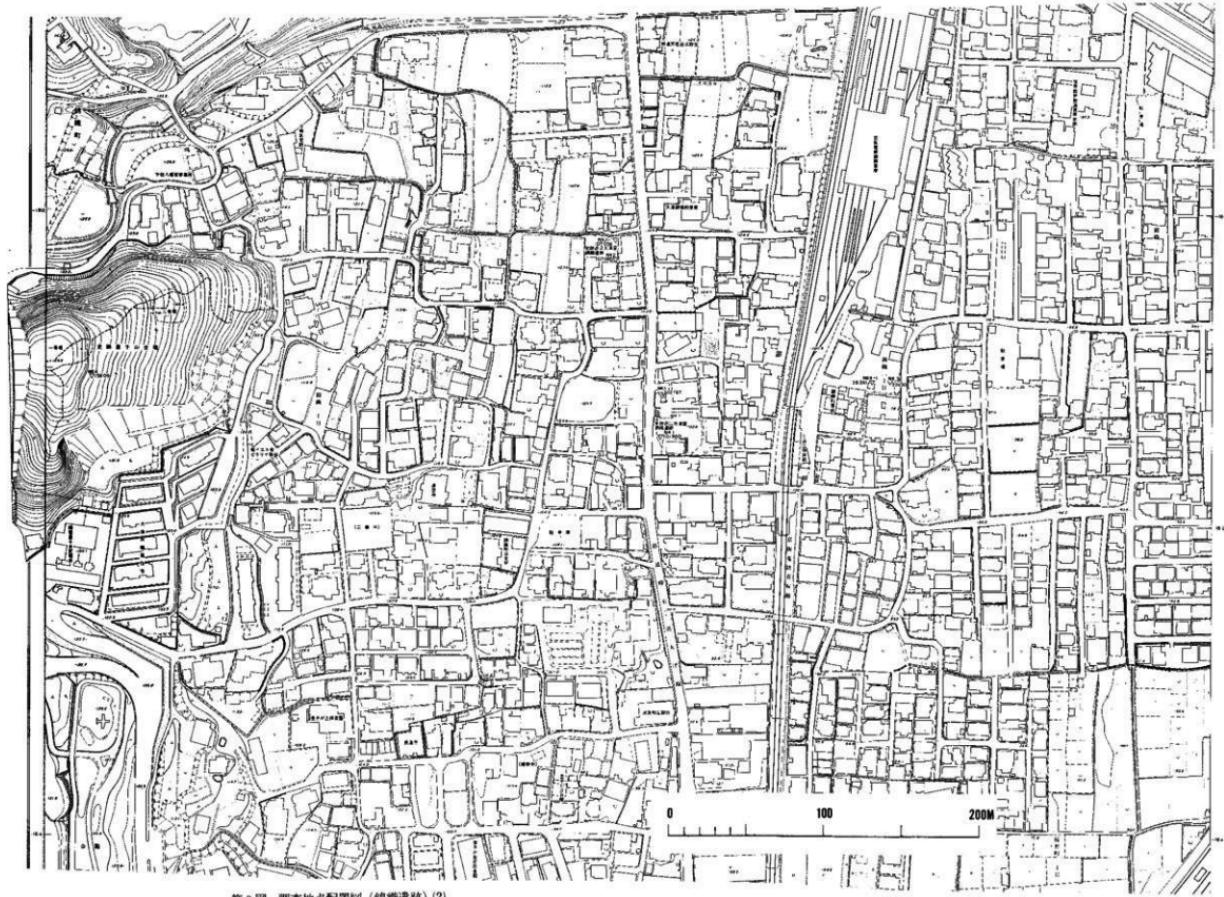
周知のとおり、錦織遺跡、南滋賀遺跡の所在する大津北郊域は、狭小な扇状地性の平野が、琵琶湖と比叡山系の間に展開しているところではあるが、古来、湖西楽浪路(北陸道)のつけ根にあたる交通上の要衝でもあり、縄文時代から中・近世までの各種の



第1圖 位 置 圖



第2図 調査地点配置図（南滋賀遺跡）(1)



第3図 調査地点配置図(錦織道路)(2)

遺跡が濃密に分布する地域でもある。調査対象地の錦織・南滋賀地区に限定しても、明確な遺構の検出はないが、縄文時代に属する土器片は各地で発見されているし、弥生時代の遺跡は、ほぼ全域に分布している。その中でも、昭和33年に調査された、南滋賀遺跡では、弥生中期の方形周溝墓と土壙墓群からなる、集団墓地が発見されており、史学上重要な位置を占めるほか、墓地に対応するとみられる集落が、南滋賀廃寺の中心伽藍の北および東に分布している（南滋賀遺跡・大伴遺跡）。錦織遺跡でも弥生時代中期の方形周溝墓などが発見されており、集落の継続が知られる。古墳時代に入ると、錦織遺跡の西に位置する独立丘上に、県下最古の前方後方墳、皇子山1号墳と2号墳（円墳）が前後して築造され、後期にも、水車谷古墳群、福王子古墳群などが築造されている。そして、大津宮時代に前後する時期には、天智天皇の大津宮と、それに深く関連するとみられる、南滋賀町廃寺が造営され、我が国の政治的な中心となるのである。

調査は、そのほとんどが、個人住宅の新築、建て替えに伴う小規模なもので、成果はいずれも断片的なものであるが、地元地権者の御協力により、地道な積み重ねを、今後もすすめる必要があろう。

なお昭和60年度に実施した調査は別表のとおりであり、その詳細については、今後報告する予定である。
（大橋信弥）

昭和60年度 調査一覧

番号	申請者	所在地	調査期間	調査内容	対象面積
60-1	山橋 博	大津市南志賀一丁目	4月8日 ～5月16日	南滋賀町麻寺の推定東院に当り、調査地の東端で深い南北にのびる落ち込みと、その西にはほぼ並行して走る石列を検出したほか、基壇状の高より、多量の瓦を出土した土塁2基などが発見された。	624.92m ²
60-2	濱田 喜義	大津市錦織一丁目	4月11日 ～4月17日	土石流の流出とみられる河道にあたり砂層が厚く堆積し、大津宮にかかわるとみられる遺構の検出はなかった。	468.12m ²
60-3	西田 道	大津市錦織二丁目	5月18日 ～6月11日	推定大津宮跡南門東回廊の延長線上に当たり、調査対象地の北側にトレーンチを設定、予想通り、現地表下40cmで、1辺約1.2mの方形龜り方をもつ柱穴3基を検出した。柱間は約2.7mで、既開発地との関連を復元すると、從来、その構造から複廊とみられていた南門回廊のうち、未検出の南柱列に当ることが判明し、複廊説を裏付けることになった。	150 m ²
60-4	寺尾 隆	大津市南志賀二丁目	6月7日	旧河道とみられる砂層が深く堆積し遺構・遺物の検出はなかった。	141.91m ²
60-5	青木 義明	大津市錦織一丁目	6月24日 ～6月29日	昭和50年度調査地点の北側に当り、地表下1.2mで平安時代後期の造構面を検出し円形のビットを若干検出しが、その下層は黄褐色砂礫層の地山で、遺構の検出はなかった。	338.19m ²
60-6	山橋 元信	大津市南志賀一丁目	7月8日 ～7月11日	南滋賀町麻寺の寺域南東コーナーに当るが、削平が著しく、明確な造構面の検出はなかった。	484.58m ²
60-7	西村由太郎	大津市錦織一丁目	7月15日 ～8月10日	推定大津宮内裏南門と同正殿の中間地点に当り、二面の造構面を検出した。地表下約10cmで検出した第1造構面では、平安後期のビット・土築・瓦窓が検出され、地表下30cmで検出された第2造構面では弥生中期の溝状遺構が検出された。特に平安時代の瓦は、延暦寺支院尊勝院にかかわるものである。	81.22m ²
60-8	柳田 忠利	大津市南志賀一丁目	1月21日 ～1月25日	南滋賀町麻寺の寺域内に当るが、直接寺院にかかわる遺構の検出はなかったが平安時代と白鳳時代の二時期の造構面を検出し、ビット・瓦窓など多数が発見された。遺物は瓦が大半で、複雑蓮華文軒丸瓦のほか方形瓦が80%を越える比率で出土した。	70.0m ²

II. 59-1 地点発掘調査概要

1. 調査に至る経過

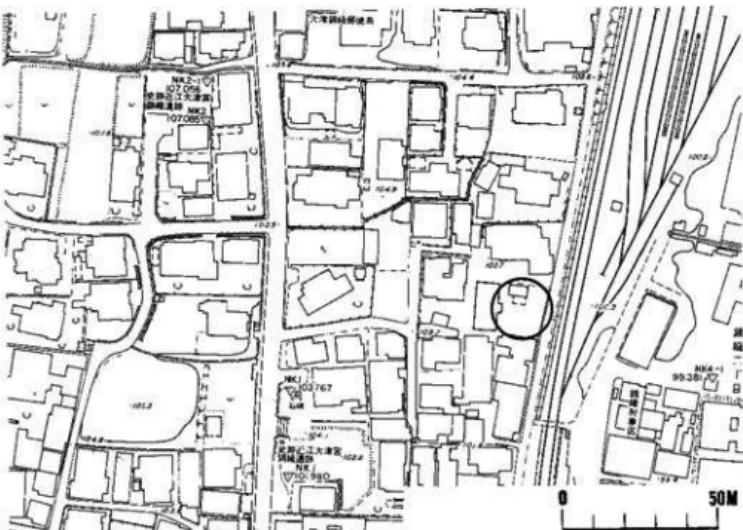
大津市錦織二丁目において綿田光藏宅の建設が予定され、当地が錦織遺跡の範囲内にあたるため、事前調査を実施した。

調査は昭和59年4月から同年5月まで行なわれた。

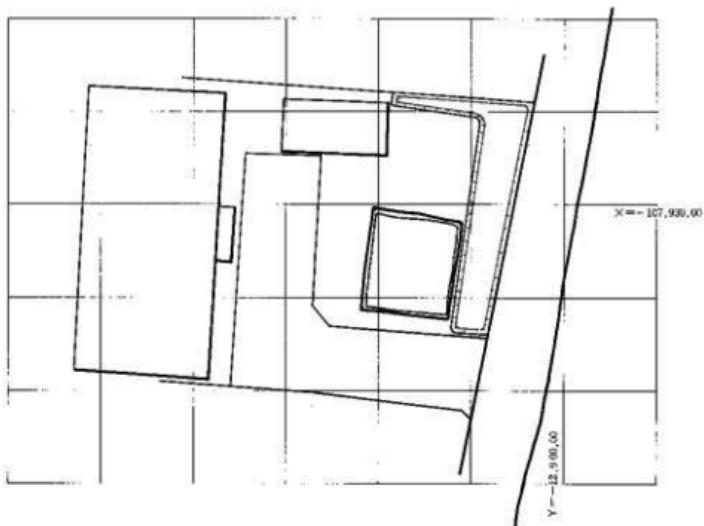
発掘調査及び整理調査には以下の方々の協力を得た。宇野優子、大野かなゑ。

2. 調査経過

調査地は、推定大津宮の内裏正殿、南門等が発掘された宮の中心地から東へ約80mほどの所に位置し、大津宮推定復元図によると、大垣で囲まれた推定正殿城の外であ



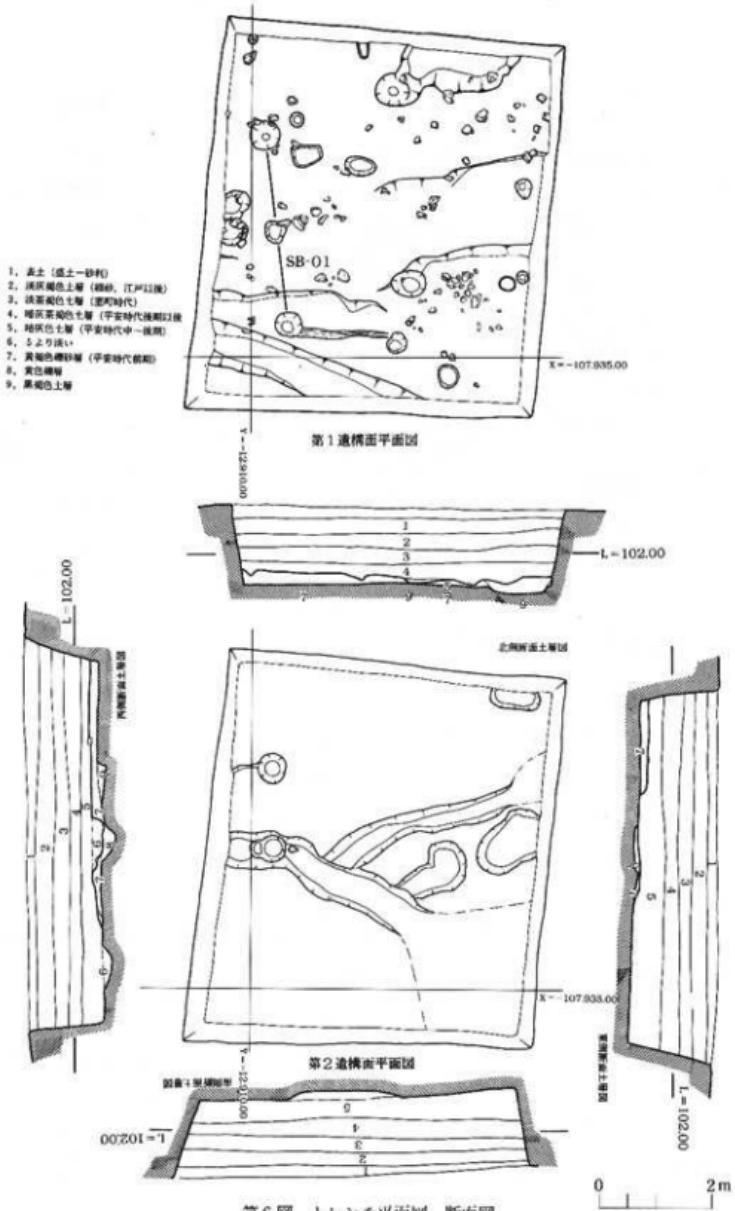
第4図 調査位置図

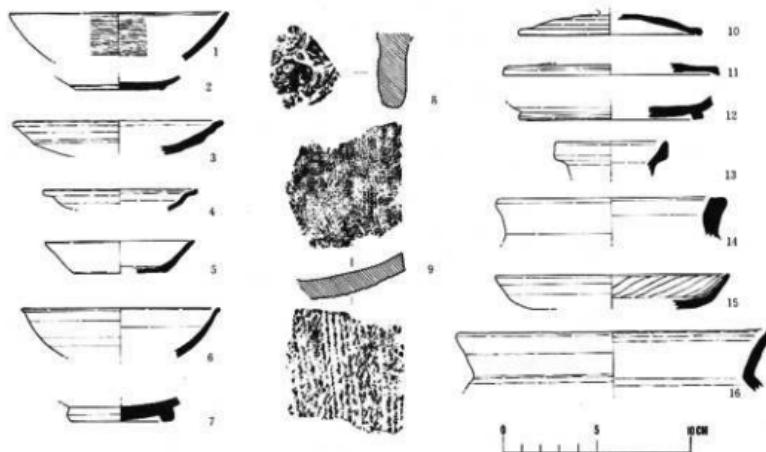


第5図 トレンチ配置図 (1 / 300)

る。この付近は、西の山から東の琵琶湖に向けてゆるやかな傾斜地となっており、正殿跡検出地との遺構面（ほぼ同時期の遺構面【飛鳥～平安】とする）の比高差は約2mある。調査地より東は小道をはさんで、斜面を削り取って敷設した京阪電鉄石坂線が南北に走る。琵琶湖への傾斜はさらに東の国鉄湖西線の付近まで続き、以後は、湖まではほぼ平坦地となっている。

発掘調査は、敷地内に南北6m、東西5mのトレンチを設定して行った。表土下約1mの堆積は第6図に示すとおりで、以下は花崗岩系の黄褐色礫土の地山となっている。図で示す第5層の暗灰色土壙までは遺構は見られず、単純な水平堆積を示す。各層の時代推定は、希薄に含まれている遺物（主に土師器皿）をもって行っている。第5層を除去した所でピット及び溝が検出された。埋土は第5層にほぼ共通し、検出した遺物も第5層に共通するため（11世紀、第5層より掘り込まれたものと考えられる）。さらに下層にもう一面遺構が見られ、ここよりもピット、溝が検出され、平安前期の遺物が出土している。





第7図 出土遺物実測図

3. 遺構・遺物

1) 第一遺構面（第6図）

北西から南東にかけてゆるい傾斜を示し、小段をもって地面を整形したあとが見られる。西側には一線上に列ぶ三ヶのピットが見られ掘立柱建物の柱穴の可能性があるが調査面積が狭いため断定はできない。南側では西流する溝が検出されている。

遺物（第7図）の多くは第5層の暗灰色土層中に包含されていたもので、ピット内、溝内からの遺物は小片で図化できなかった。

1、2は黒色土器B類の塊で、口縁端部内面に一条の沈線があり、内外面とも緻密なヘラ磨きが施されている。3・4は土師器皿で、3はAタイプ大皿で口縁を二段ナデするもの、4はCタイプ小皿で薄い肉厚のものである。5は、ロクロ成形の土師器皿で、底部裏面に回転ヘラおこしの痕が見られる。6は灰釉陶器の塊、7は白色の無釉陶器で、削り出しの輪高台を持つ。

瓦もごく小量検出している。8は軒丸瓦の瓦当面の小片で、意匠はかなり乱れているが単弁蓮花文のようである。9は平瓦で、表面に布目、裏面に繩目タタキが見られ、

側面はヘラで切り取っている。胎土は、7、8共に須恵質で、砂粒を含み粗い。

遺物はいずれも11世紀前葉～中葉にかけて位置するものと思われる。

第二造構面（第6図）

第一造構面下約15cmで第二造構面を検出した。小量のピットと、西から東へ流れる自然氾濫流がある。小流の埋土は小石を多く含んだ綈土で、遺物の多くはここから出土した。

10～14は須恵器で、10～12は壺及び蓋で10はツマミを有すると思われる。15は、土師器皿で、口縁内面に暗文を施している。16は、土師器甌で、内面に炭化物、外面上スが多くの付着している。いずれも9世紀に位置するものと思われる。

3. ま　と　め

調査面積が狭いため、十分な造構検出はできず、当初期待された大津宮関係の造構・造物は検出されなかった。しかしこの地点における、基本堆積の状況は十分に観察でき、調査地から、西・南に広がると思われる弥生時代の遺跡の範囲、大津宮以後の遺跡、特に11世紀、13世紀、を考えるに十分に役立つものである。
（横田 洋三）

注1. 林 博通「大津京」（ニューサイエンス社） 昭和59年

注2. 横田洋三「出土土器皿編年試案」平安京跡研究調査報告第5輯 平安京左京五

条三坊十五町（財團法人古代学協会） 昭和56年

同 「土師器皿の分類と編年」平安京跡研究調査報告第11輯 平安京左京

四条三坊十三町（財團法人古代学協会） 昭和59年

III. 59-2 地点の調査

1. 調査に至る経過

大津市錦織二丁目櫻村岩吉宅において、所有地の宅地化が計画された。

この地は大津宮が存在していた錦織遺跡の中心地にあたり、北西10~20mに正殿跡、南30~40mに大門跡及び回廊跡が検出されたところである。

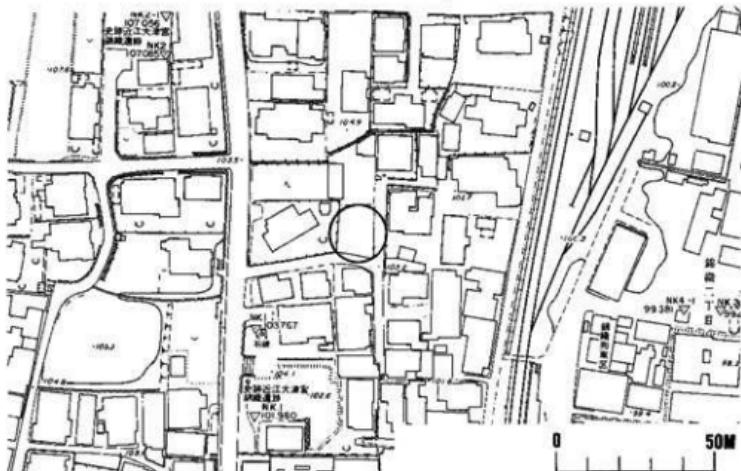
調査は、昭和59年6月11日から昭和59年7月19日まで行われた。

発掘調査を実施するにあたって、以下の方々の協力を得た。

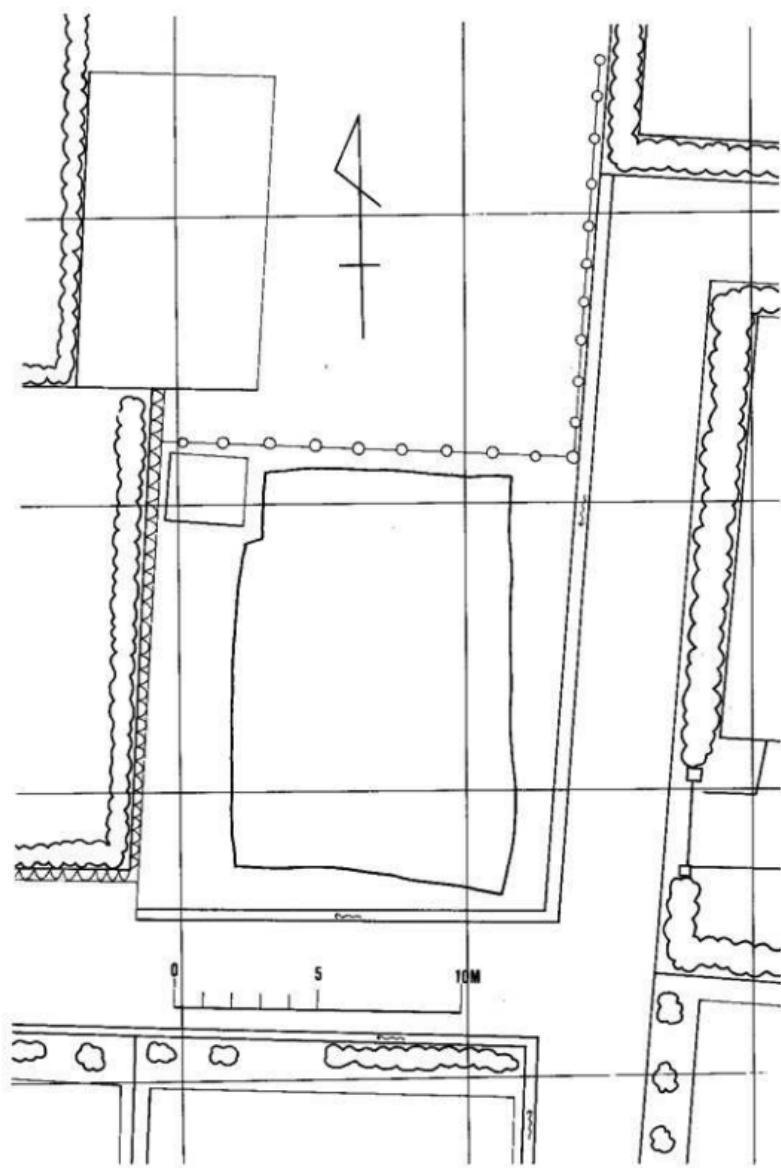
井浦由美・森本敦子・渡辺健彦・前田淳・田中英行・磯田雅仁・堀田真弓・杉本紀子・高井千尋・吉永公一・前田康史・片岡慶子・藤原里佳・岩永篤彦・寺田美紀・北村太賀子・狩野喜昭・田中久美・小萩美佳子・土肥浩子・山原昭彦・西村智子・川端千晶・馬場真理子・佐野祐子・川村麻理子・山口忠彦・岡安雅彦・東高志。

2. 調査経過

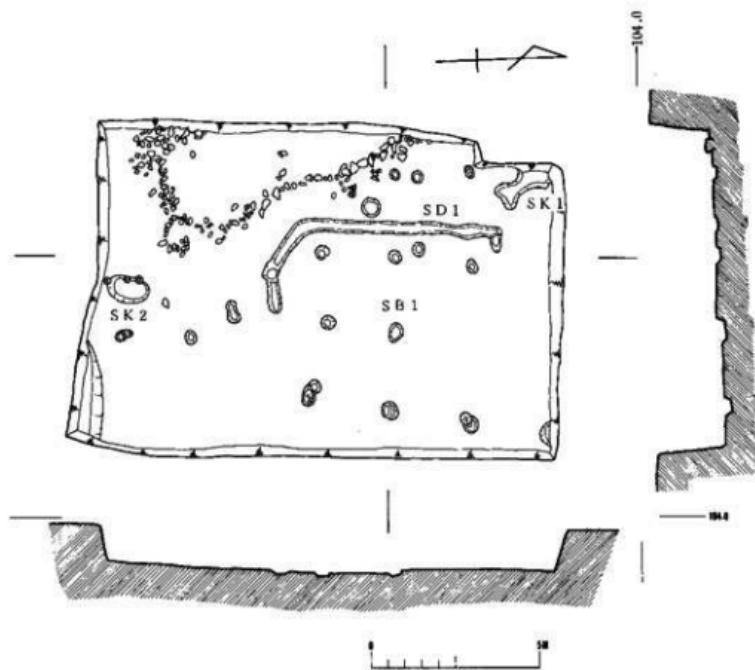
本調査地は、大津宮宮碑の真北にあたり、少し入りくんだ住宅地の中にある。も



第8図 調査位置図



第9図 トレンチ配置図



第10図 上層遺構実測図

と畠地で、西は宅地、東と南は道路に囲まれ、北は空地となっている。

発掘調査は、敷地内に東西約10m、南北約15mのトレンチを設定して始められた。表土を除去すると茶褐色の砂質土に変化し、地表面下約1.2mで、上層位は茶褐色を基調とした砂質土で、バックホーにより掘り下げを行った。

上層遺構面は、西半が黄色砂と黒色砂をつき固めた層、東半は黄褐色砂に分かれ、それに遺構が切り込まれていた。

下層遺構面は上層遺構面より約30cm下がり、褐色砂質土と黑色砂質土が斑らになつた層である。

尚、黒色砂質土層から弥生土器の多量出土を見たが、大津京遺構而保護のため、ここで止めておいた。

3. 遺構

(1) 上層遺構面（第10図）

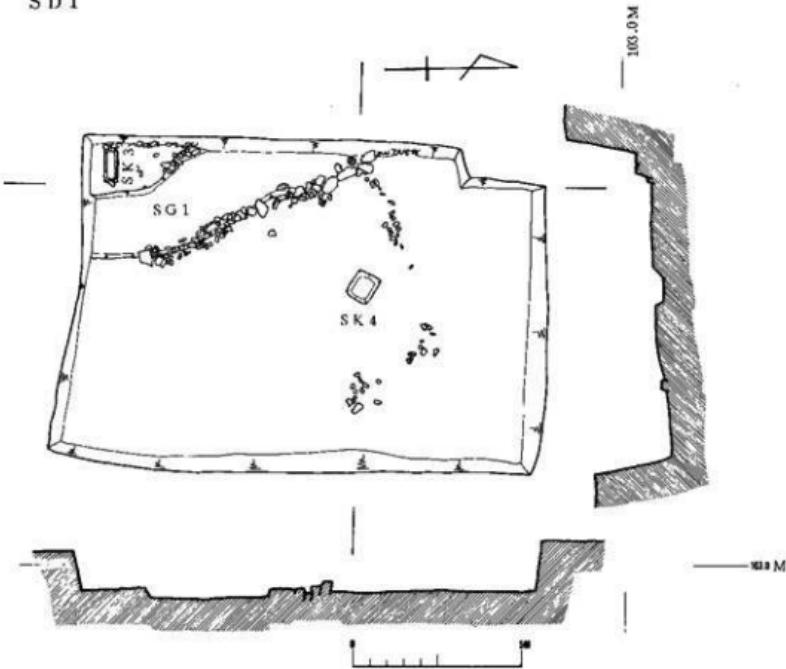
掘立柱建物

S B 1

3間以上（7.5m）×2間（4.5m）の南北棟の建物で、柱間は2.2~2.5mを測る。柱穴は直径40~50cmの円形を呈し深さは20~40cmであった。恐らく総柱建物と思われるが、一部検出できなかったものもあり、あるいは南にヒサシを持つ建物の可能性も残る。柱穴から鎌倉時代の土器が少量出土している。

溝

S D 1



第11図 下層遺構実測図

S B 1 の西と南の一部に接して「L」字形を呈する溝が巡っている。南北 6m 南端で東へ曲って東西 2.5m、幅 40cm、深さ 10~20cm を測る。S B 1 に添っているところから、S B 1 の雨落ち溝と考えられる。

遺物は鎌倉時代の土器が若干出土したが、図示できなかった。

土塙

S K 1

トレーナー北西端で検出された。西の一部は未調査であるが、長さ 1.5m、幅 0.7m の鼓形を呈している。深さは 20cm であった。

遺物は発見されなかった。

S K 2

トレーナー南端中央に位置し、長さ 1.2m、幅 0.8m の階円形を呈している。約 30cm の深さをもち、古墳時代後期の遺物が出土している。

(2) 下層遺構面（第11図）

土塙

S K 3（第12図）

トレーナー南西端で発見された。長さ 1m、幅 0.3m の椭円形を呈し、深さは 10cm を測る。長軸の甕を合わせ口にしており、甕棺墓と考えられる。

遺物は、いずれも古墳時代のものである。

S K 4

トレーナー中央で検出され、1辺約 80cm の方形を呈し、深さは 30cm であった。

遺物は発見されなかった。

池状遺構

S G 1

トレーナー南西端を、西端から南へ向う形を呈している。長さ 8.5m 以上、最大幅 2.5m、深さ 30cm を測る。左右肩を 10~60cm の様々な自然石で覆い、一部石垣状に積み上げられた所もみられる。黒色砂質土が包含され、遺物は弥生時代の土器と石庵丁が出士しているが、この時代のものではなさそうである。

4. 遺 物

上・下層の遺物、及びそれぞれの包含層から、弥生時代～平安時代の遺物が出土している。なお、下層遺構面のベースと考えられる、黒褐色砂質土層より多量の弥生土器の出土を見た。それも最後に掲げておく。

(1)上層遺構而出土遺物（第13図）

S B 1 柱穴から7世紀初めの須恵器杯蓋（1）と12世紀後半～末頃の瓦器椀（2）がそれぞれ出土している。2は内面に密な、外面に粗いヘラミガキを施している。

S K 2 いずれも6世紀末～7世紀初め頃の須恵器杯蓋（3・4）であるが、下層の遺物が混入したものであろう。

(2)下層遺構面出土遺物（第13～15図）

池跡、いずれも須恵器で、杯蓋（5・6）は6世紀後半頃、杯身（7）は7世紀中頃、甕（8）は6～7世紀頃のものであろう。

50・51は土壙墓棺に転用されたもので、いずれも古墳時代の長胴甕である。口縁が内湾し、端部の内側に段をつくる。

(3)包含層出土遺物（第13図）

上層 須恵器は杯蓋（15）、杯身（16・17）、高杯（18）、土師器甕（19）、皿（20～23）が出土している。15～19は6世紀後半～7世紀頃、20～23は、11～12世紀頃と考えられる。

下層 須恵器は杯蓋（9・10）、杯身（11～13）、土師器は甕（14）が出土している。いずれも6世紀後半～7世紀頃のものであろう。

(4)黒褐色砂質土出土遺物（第13～15図）

いずれも弥生時代の遺物である。

壺（24～29・31～34）

24、25は体部外面に3条以上の棒描直線文が施される直口壺で、25は外端面は刻み目がみえる。

26～29は広口壺で、27・29は口縁部内面に山形の浮文がみられ、外端面にそれぞれ波状文・刺突列点文などが施されている。

31～34はいずれも底部の破片で、32は上げ底である。

甕（30・35～49）

いずれも大きく外反する口縁をもつもので、外端面に刻み目や刺突列点文、ハケ目

などが施されている。外面はたて及びななめのハケ目である。なお、35は口縁が「く」の字に外反するものである。48・49は端部に山形をつくる波状口縁を呈する。

5. ま と め

上層造構面では、掘立柱建物（S B 1）とそれに付随すると考えられる雨落ち溝（S D 1）や土壌などが検出された。このS B 1とS D 1は、ともに出土した土器から平安時代後期～末頃の年代が想定される。この時代の造構は、県道から東ではあまり検出されず、いずれも西側に見られる。当地も東へ傾斜した部分を水平にするなど整地の跡がうかがえる。これは京阪電鉄より東では、トレンチの湧水が著しいなど、かなりの低湿地であったと想像され、西よりの高燥な地に住居を構えたものと思われる。

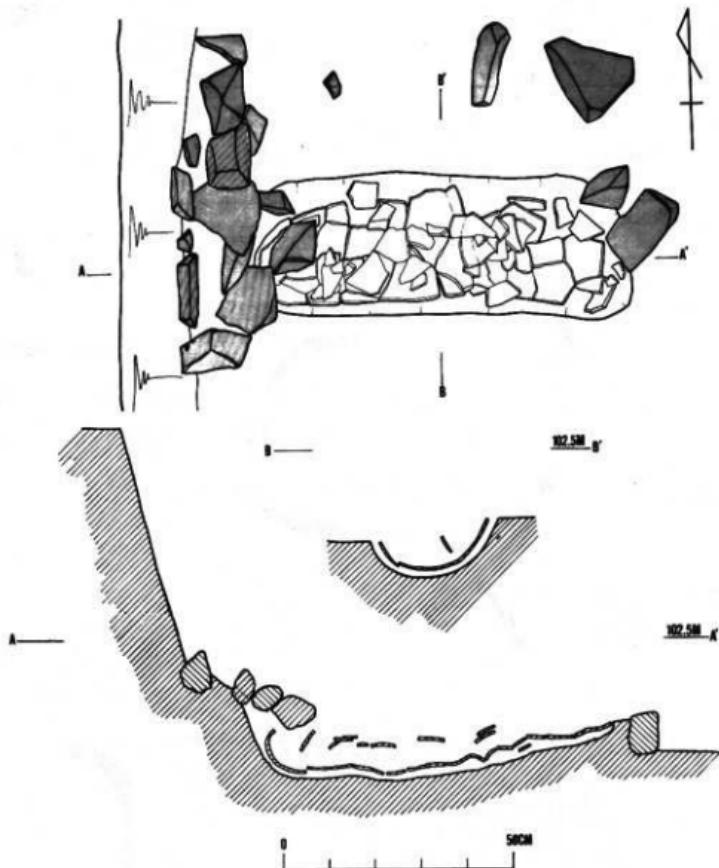
下層造構面では、西端で検出された池跡（S G 1）と合わせ口壺棺墓（S K 3）などである。S K 3では、6世紀中頃から8世紀にかけて近江地方でよく見られる近江型壺が棺として転用されており、この面の年代を推定させる資料と考えられる。また、トレンチ西半分に見られた黄褐色と黒色の砂を固めた整地層は、出土した遺物や周辺の遺跡の状況から、大津宮時代の整地面と考えられる。S K 3がそれを切り込んで形成されていることや、当地が大津宮の中心地であったことなどから、S K 3は大津宮廃絶後に構築されたものであろうと思われる。

S G 1は、覆土が黒褐色砂質土で、底面に水が流れた形跡などが認められないことなど、池として機能したものかどうかは不明である。また、S K 3同様に大津宮時代の整地面を切り込んで構築されていることから、すくなくとも大津宮時代より後の構築物であると考えられる。

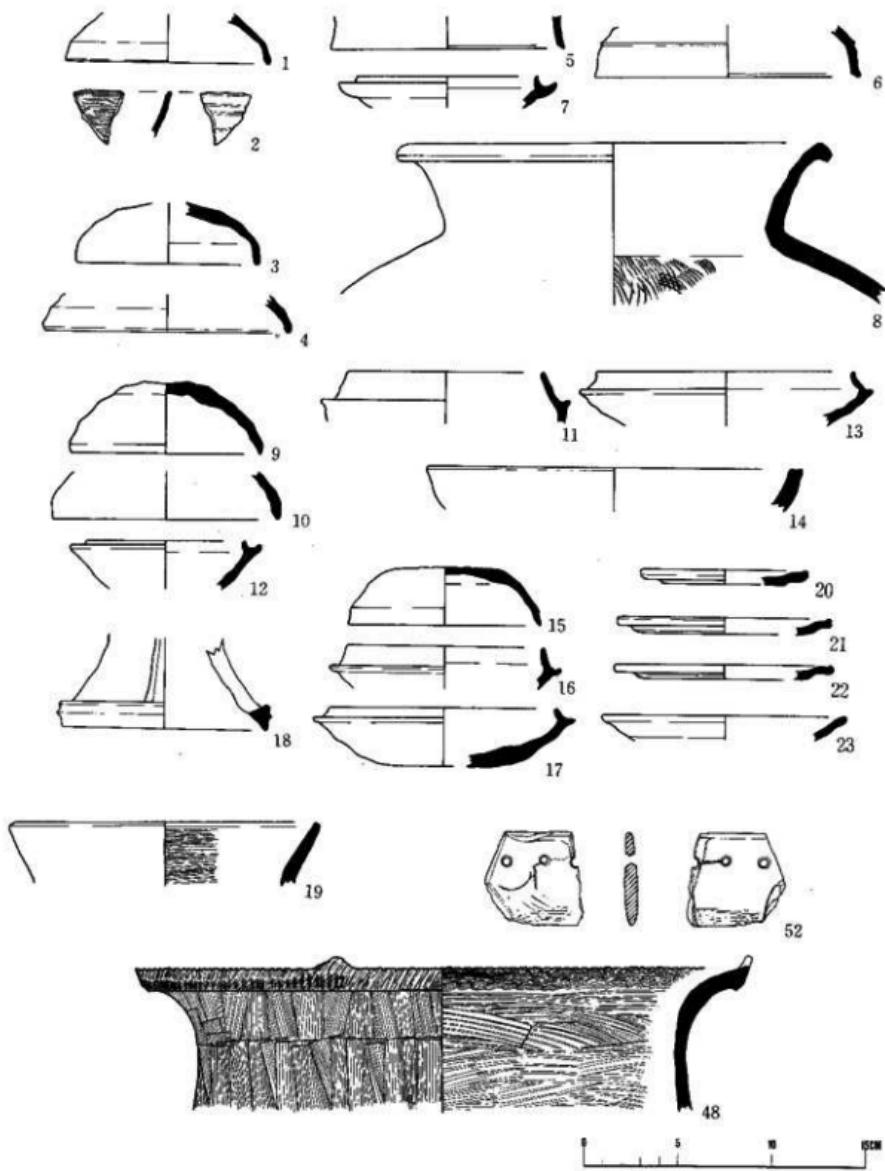
下層造構面の西半分の大津宮時代の整地面の下やS G 1の下層の黒色砂質土（黒ボク層）から弥生時代の遺物が多量に出土している。当地は、大津宮時代の造構面を保護するため、下層の確認は数ヶ所の深掘りに止めたが、そこから多くの弥生土器が出土している。錦織遺跡は、ここ10年あまりの間に100ヶ所近くの発掘調査を行っているが、各所に多量の弥生土器を伴った包含層や方形周溝墓などの造構が発見されている。特に本調査地周辺では、黒色砂質土層に弥生土器の包含される割合が非常に高いと言える。昭和58年度の正殿跡の調査でも下層に方形周溝墓が確認されており、ここは当地から北西へ約10～20mしか離れていない。従って、本調査地でも大津宮時代

の整地面の下に、弥生時代の遺構が広がる可能性が大いにあると考えられる。

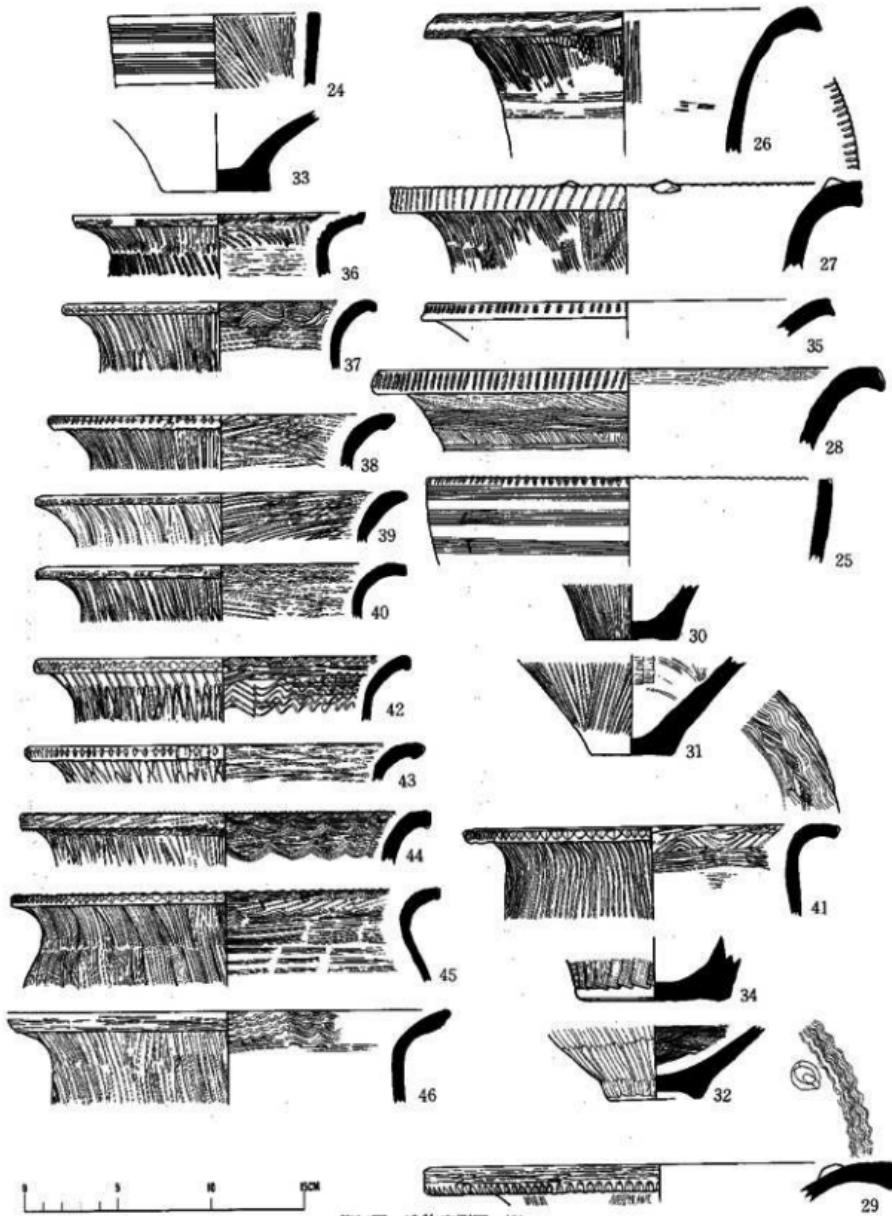
(三宅 弘)



第12図 合わせ口斐棺出土状況図



第13圖 遺物実測図 (1)



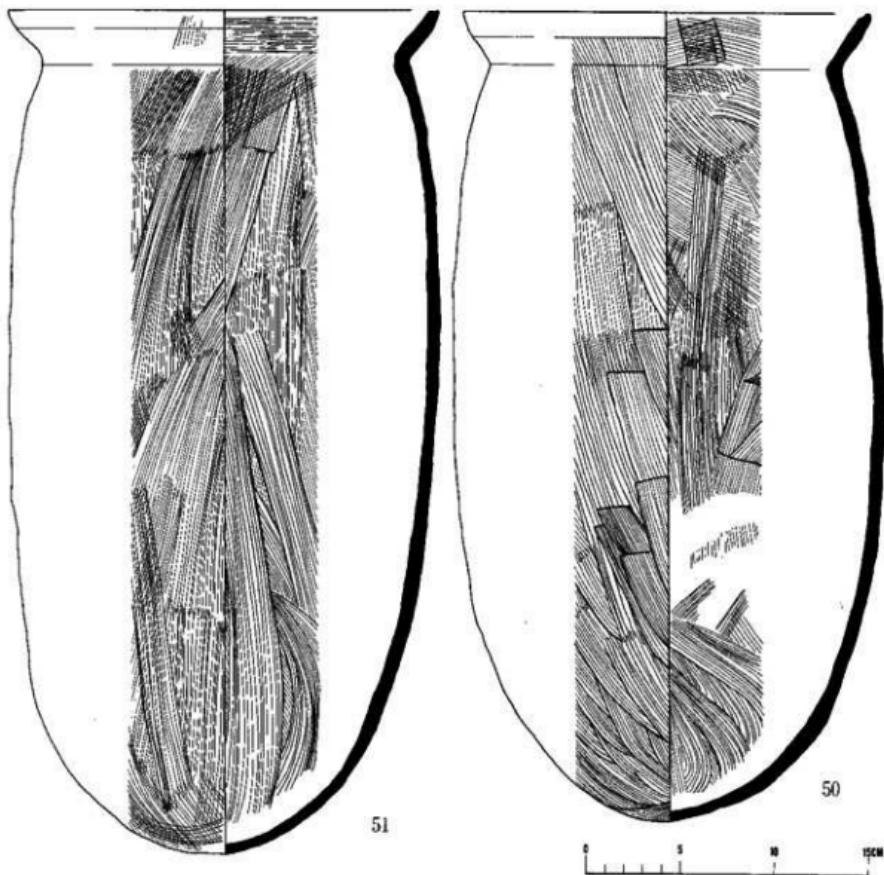
第14図 遺物実測図 (2)



47



49



50

51

第15図 造物実測図 (3)

遺物観察表

器種	器形	土器番号	形態上の特徴	手法上の特徴	備考
漆 器 蓋	杯	1	天井部は中央が欠失しているものの内空きにのみ、不明瞭な被膜をもって外へ開き口に直線的に凸縁部がある。端部は丸く取めている。	すべてヨコナダである。	粘土：1~2mmの石英、長石を少し含む。 焼成：硬質 色調：茶褐色灰褐色
瓦 器	壺	2	内空きにのびる口縁は端部でやや外反し、先端を丸く取れる。 内面端部に1条の浅い洗継がめぐる。	内面はヨコナダの後、直なヘラミガキ。 外側は本刷継の上から施なヘラミガキ。	粘土：稍良、焼成：硬質 色調：茶褐色 灰褐色灰褐色
漆 器 蓋	漆	3	天井部は丸孔を帯びると思われる口縁に向って内寄する。 口縁部は明確な縁をもたず端部に至り端部は丸く取れる。	全面ヨコナダ。 外側のほとんどは自然縁が付着している。	粘土：2~3mmの石英長石を多く含み不純、焼成：硬質 色調：灰色(内部と外面本刷継部分)、他は茶灰色
漆 器 蓋	杯	4	口縁部は内寄きに下がり、不明瞭な被膜を形成して端部は丸く取れる。	全面ヨコナダ。	粘土：1mm以下の石英長石を少し含む。 焼成：硬質 色調：灰色
漆 器 蓋	漆	5	軽量の口縁部のみである。口縁はやや外傾きに下がり端部内面に縁を有する。	全面ヨコナダ。	粘土：0.5mm以下の石英、長石を少々含む。 焼成：硬質 色調：灰色
漆 器 蓋	漆	6	天井部はやや内寄きに下がり剛健な後縁を有しつつも内傾き端部に口縁が残る。	全面ヨコナダ。	粘土：1mm以下の長石等を少々含む。 焼成：硬質 色調：灰色(底面の自然縁が少し付ける)
漆 器 身	杯	7	受部は内寄乳頭に外上方へのび縫部は丸くおさめる。立ち上がりは必ずしも内傾して端部にび縫部は丸く取れる。	全面ヨコナダ。	ろくろの回転方向は丸まり。
漆 器 身	漆	8	口縁部は外反して立ち上がり、端部はやや垂れたり乳頭に凹溝をもつて取れる部はほぼ105°に聞く。	底部内面は円弧形き、その他は丸軸ナダ。 口縁部内面と外面全体に自然縁が付着する。	粘土：ほぼ1~1.5mmの白色砂粒を表面に多く含む。2~3mmの石英、長石粒をわずかに含む。 焼成：良好、色調：外側：淡灰色 内側：口縁部は淡黄色、全体は墨灰色 断面：淡褐色 色調：茶褐色
漆 器 身	杯	9	丸い天井部が内寄きにのび縁を不規則にして口縁につく。 口縁は必ずしも直徑に下がり端部は丸い。	全面天井部は半調整、他はヨコナダ。	粘土：1mm以下の石英、長石等を多く含む。 焼成：硬質 色調：青灰色
漆 器 身	漆	10	天井部との境を不規則にして口縁が垂下する。 端部は丸い。	ヨコナダ。	粘土：1mm以下の石英、長石を少し含む。 焼成：硬質 色調：灰色
漆 器 身	杯	11	口縁は内寄きみにのびている。 受部は必ずしも外上方へのび先は丸い。立ち上がりは少し外傾しつつ内傾し先は丸い。	全面ヨコナダ。	粘土：1mm以下の石英、黒色砂粒を少し含む。 焼成：硬質 色調：青灰色、外面口縁部(受部以下)の自然縁は白褐色
漆 器 身	杯	12	口縁は外反して上向外へ張く。受け部は外上向外へのび少しだけをもつ。先端は丸い。立ち上がりは内上向外へのび先は丸い。立ち上がりは強く外傾しつつ内傾し先は丸い。	ヨコナダ。	粘土：1mm以下の石英、長石を少し含む。 焼成：硬質 色調：青灰色、外面は灰白色の自然縁付ける
漆 器 身	杯	13	口縁は内寄きみに立ち上がり、端部に水平方向のつまみ出しだけをもつ。	ヨコナダ。	粘土：1mm位の石英、長石を少し含む。 焼成：硬質 色調：青灰色
漆 器 身	杯	14	口縁は内寄きみに立ち上がり、端部に水平方向のつまみ出しだけをもつ。	ヨコナダ。	粘土：1mm位の石英、長石を少し含む。 焼成：硬質 色調：茶褐色
漆 器 身	杯	15	天井部は平らで、内寄乳頭に口縁部がのびる。 端部は丸く取れる。	天井部外周は凹縫部へ切り。 内面は凹輪ナダのあと一定方向のナダ。その他の施は圓軸ナダ。	粘土：薄、0.2mmの白色石粉を少し含む。1mmの石英、長石粉を数個と3mmの石英粉一個を含む。 焼成：はは良好 色調：淡褐色 ろくろの回転は右回り。
漆 器 身	杯	16	口縁は内寄し受け部は丸く上方にまかり先は丸い。 立ち上がりはやや短かく内傾しつつ外傾し先は丸い。	ヨコナダ。	粘土：0.5mmの石英、長石等を少し含む。 焼成：硬質 色調：灰色

基 礎 層 高 度 評 定	18	比較的平らな底部から口縫が内側する。 受け側は短く水平にのび先は丸い。 立ち上がりは短く内傾しつつ外反し先は丸い。	外面部は未調整、他はヨコナダ。	粘土：1mm位の石英、長石等を少し含む。焼成：硬質。 色調：淡赤褐色。
	19	脚部は「ノ」の字状に開き、端部で外方に肥厚する。 通し孔は脚部全体に菱形のものが穿たれるが数は不同。	ヨコナダ。	粘土：1mm位の石英、長石等を多く含む。焼成：硬質。 色調：灰色、自然色は緑褐色。
土 壁 部	19	口縫はゆるやかに外反し端部で内方につまみ出 し、端部は外傾する。	外面部ヨコナダ、内面部ヨコの長いハケ目。	粘土：2~3mmの石英、長石他の砂粒を多く含む。焼成：やや硬質。 色調：淡褐色。
	20	ほぼ平らなところもあられる底部から、様なでによる 明確な腰と腰として口縫が短く屈曲する。端 部はつまみ上げ外端部に沈面が走る。	外底部は未調整、他はヨコナダ。	粘土：良好、焼成：やや硬質。 色調：淡褐色。
脚 部	21	口縫は裏部との境によこなでによって明確にし て外方に屈曲する。 端部はつまみ上げているため外側に沈面が走る。	外面部底部分を除いて、ヨコナダ。	粘土：1mm位の長石等を少し含む燒 成：やや硬質。 色調：淡褐色。
	22	口縫は腰などによって底部との境を明確に区別 して外方に屈曲する。 端部は内方に巻き込む。	外底部は未調整、他はヨコナダ。	粘土：稍良、焼成：やや硬質。 色調：白色。
部 分	23	口縫は腰などみに立ち上がり上半部で外反する。 端部は腰くびれる。	口縫下部の未調整部分を除いて、ヨコナダ。	粘土：0.5mmの長石をわずかに含む 焼成：無。
	24	口縫は腰くびれる。	外面部は7条1組の櫛状直線文を3段以上に 施す。	粘土：1~2mm石英、長石、ウンモチ 等の砂粒を多く含む。焼成：やや硬質。 色調：淡褐色。
外 部 部	25	体部以下欠損している。体部から口縫部はわ ずかに内寄気味に上方へ直線的にのびる。	口縫部は斜直文。	粘土：1mm位の石英、長石その他の 砂粒を含む。焼成：硬質。 色調：淡褐色。
	26	脚部はゆるやかに外反し、口縫で大きく反る。 端部は外側する平面をもち、肥厚させる。	内面はナダのあと、テナハケ文様。外面部 は複数に斜直文（3条1組×2）。	粘土：1~2mmの石英、長石を多く 含む。焼成：軟質。
生 土 壁	27	口縫は外反し端部に直角に平面をつくる。 口縫内側に円錐形の突起が數ヶ所に貼り付く。	口縫部にテナハケ、脚部はナダのあとテナハケ。 複数に斜直文。	粘土：1mm位の石英、長石等を多く 含む。焼成：やや軟質。 色調：淡褐色。
	28	口縫は外反し、端部付近ではほぼ水平となる。端 部は下方につまみ出し外傾する手前をもつ。	内面部ヨコハケ（下部ハクリ） 外面部部は斜直列点文口縫はヨコナダメハ ケの後、6条1組の櫛状直線文を2箇蓋す。	粘土：1mm程度の石英、長石赤褐色 等の砂粒を多く含む。焼成：やや硬質。 色調：淡褐色。
土 壁 部	29	口縫部は大きく、外反し端部で肥厚する。内面 に実起物がある。	内面はヨコナダ、4条1組の波状文。 外面部ハケの段ナダナナメ。	粘土：1~3mm程度の石英、長石そ の他多くの砂粒を含む。 焼成：軟質。
	30	底部のみ残存、中央がややへこんだ平底で、直 部から体部にかけて腰があり、腰部と体部の 接合は明確である。体部はやや外に開きながら のびる。	体部外側はテナハケ、底部外側はナダ。 内側はナダ。	粘土：1~3mm程度の石英、長石そ の他多くの砂粒を含む。 焼成：やや硬質。 色調：淡赤褐色。
基 礎 部	31	平らな底部からやや外反みに体部がのびる。	外面部はナダハケ、内面部ヨコor ナナメのハケ。 内面部部はナダ、他は未調整。	粘土：1~2mmの石英、長石、ウン モチ等の砂粒を多く含む。焼成：硬質。 色調：内面褐色、外面部色と底面部 分が黒灰色。
	32	底部は中央部のへこんだ形で体部は外へ開き氣 味に伸びている。	内面部は未調整、体部はヨコハケ。外面部 部は未調整、体部はヘラミガキ。	粘土：0.5mm以下の石英、長石、金 雲母を含む。焼成：やや軟質。 色調：内面褐色、外面部色と底面部 分が黒灰色。
基 礎 部	33	平らな底部から外反して体部に走る。	マツフ。	粘土：3~4mmの石英、長石等を多 く含む。焼成：軟質。 色調：乳白色。
	34	平らな底部から腰を明確にして体部がのびる。	外面部下端はテナハケ、他は未調整。	粘土：2~3mmの石英、長石他の砂 粒を多く含む。焼成：硬質。 色調：淡褐色。

外 部	35	山線は大きく外反し端部に外折する平面をもつ。	端部に刺突列(3~4個1組)が施される。他はツメの形を示す。	粘土: 1~2mmの石英、長石等を多量に含み軽感。焼成: 軟質色調:
	36	外反して鋭く口縁は端部に割り重疊りをもつ。	外側は端部に低い波状文(3~5本1組)山線はタマ方向の粗いハケ目、底部に刺突列の羽状文。内面は細いヨコハケ後刺突列点にも羽状文。	粘土: 1~2mmの石英、ウンモ少し含む。焼成: やや硬質色調: 淡褐色。外面部半はスヌードの為、暗面褐色。
	37	口縁部はゆるやかに外反し、端部で下方向にも凹く。	口縁端部は削り目文、外側はタマハケ。内面はヨコハケ形波状文、下部はヨコハケ。波状文はヨコハケの後、内面はヨコハケ。	粘土: 1~2mm程度の石英、長石等の他多くの砂粒を含む。焼成: やや硬質色調: 淡乳白色。
	38	口縁のみである。山縁部はゆるやかに外反し端部で下方向に肥厚させる。	内面はヨコハケ。外側は端部に2段の割目。他とはタマハケ。	粘土: 1~2mmの石英や長石その他の砂粒を多く含む。焼成: やや硬質色調: 淡乳白色。
	39	口縁部はゆるやかに外反し、端部手前で少し肥厚する。	外側は端部に剃目文、口縁部にタマハケ。内面はヨコハケ。	粘土: 1~2mm程度の石英、長石その他の砂粒を多く含む。焼成: やや硬質色調: 淡乳白色。
	40	口縁部はゆるやかに外反し、端部手前で少し肥厚する。	端部内面はヨコハケ、口縁はヨコハケの後、波状文、外側はタマハケ。端部には剃目文。波状文は3条一組が2ヶ所。	粘土: 1mm程度の長石、石英その他の砂粒を多く含む。焼成: やや硬質色調: 淡乳白色。
	41	口縁部はゆるやかに外反している。	体部から端部にかけて外側はタマハケ。端部に剃目文を施す。	粘土: 1~5mmの長石、石英その他の砂粒を多く含む。焼成: やや硬質色調: 淡乳白色。
	42	口縁部はゆるやかに外反し、端部で下方に肥厚する。	内面はヨコハケの後2ヶ所波状文(上5条1組下6条1組)。	粘土: 1~3mm位の長石、石英その他の砂粒を多く含む。焼成: 濃質色調:
	43	口縁部はゆるやかに外反し、端部で下方向に肥厚させる。 焼成後に内外両面から穿孔されているようである。	内面はヨコハケ。外側端部は削目、他はヨコナガ。	粘土: 1~2mm位の石英、長石等の他砂粒を多く含む。焼成: やや硬質色調: 明乳白色。
	44	山線は大きく外反し水平になる。端部は手彫り面をも少し垂下する。	外側一面端面上に刻み文、端面から口縁にかけてヨコハケ以下はタマハケ。内面はヨコハケの後、2ヶ所に波状文を施す(上4条1組、下5条1組)。	粘土: 1mm位の石英、長石等を多く含む。焼成: やや軟質色調: 紅褐色。
中 央	45	体部からゆるやかに外反しつつ口縁がのびる。 端部はほぼ水平になり外方に水平な面をもつ。	外側一面端面上にキズ。他は粗いタマハケ。内面はヨコハケの後、2ヶ所に波状文を施す(上4条1組、下5条1組)。	粘土: 1~2mmの石英、長石等を多く含む。焼成: やや軟質色調: 明乳白色。
	46	体部はまっすぐに伸びるやかに外反する口縁に至る。 端部付近は外側に肥厚させる。	外側一面はタマハケ、端部はヨコハケ。内面は口縁部はヨコハケの後刺突状、体部内面は削目。	粘土: 1~2mmの石英、長石等を多く含む。焼成: やや軟質色調: 暗褐色。
	47	山線は外反し、端部は下方につまみ出している。	内面ヨコハケ、外側一面端部は剃目文。他はタマハケ。	粘土: 1~2mmの石英、長石、金雲母を少し含む。焼成: やや軟質色調: 乳白色。
	48	体部から口縁にかけできまっすぐにのび、上下で大きく外反する。 端部は上下につまみ出しき面をもつ。 端部の大きさを大きく山型につまみ出す。	体部から口縁にかけて外側タマハケ、内面ヨコハケ。口縁内面はヨコハケの後3条1組の低い波状文。	粘土: 1~2mmの石英、長石等を多く含む。焼成: やや軟質色調: 暗褐色。
	49	山縁部は大きく外反する。端部は大きく外反する。 端部の所々を山型につまみ出す。	外側端面はヨコハケの後3条1組の波状文、外側端部は2段の剃目文(下の方が大きい)。他はタマハケ。	粘土: 1~3mmの石英、長石等の他砂粒を多く含む。焼成: やや硬質色調: 淡乳白色。
土 器 類	50	丸い底部から直筒の脚脚の体部をもつ。底部で「く」の字に屈曲し口縁は外上方へやや寄り合ひに開く。端部は外上方へつまみ、内面端面に段を作る。	外側はタマナメ左上りのハケ目を全周に施す。その一部が内側下部にまで及ぶ。内面はタマナメ左上りのハケ目を全体に施し口縁は口方向に1ヶ所を入れている。	粘土: 1mm以下の中石、石英、長石等を多く含む。焼成: 良好(硬質)色調: 黄褐色。
	51	丸い底部から直筒の脚脚の体部をつくる。口縁は「く」の字形状を呈しやや内寄りに外へ開く。端部は水平な面を内面にもつ。	体部以下は内外面ともにタマナメのハケ目。口縁は外側が体部からつづくタマナメのハケ目。内面がヨコのハケ目。	粘土: 1mm以下の石英、長石、雲母を多く含む。焼成: やや硬質色調: 暗褐色。

IV. 59-3 地点の調査

1. 調査に至る経過

昭和59年度に、大津市皇子ヶ丘一丁目櫻山光一宅において、所有地の宅地化が計画された。当地は、大津宮の存在する錦織遺跡の南西端にあたり、大津宮と関連した時代の遺構や、以前の周辺での調査例から、平安時代の遺構が発見される可能性が高まつた。

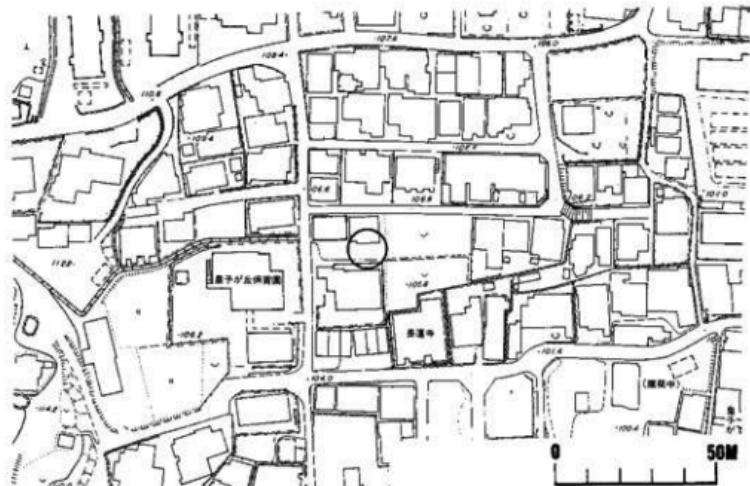
発掘調査は昭和59年11月19日から昭和59年11月26日まで行われた。

発掘調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々の協力を得た。

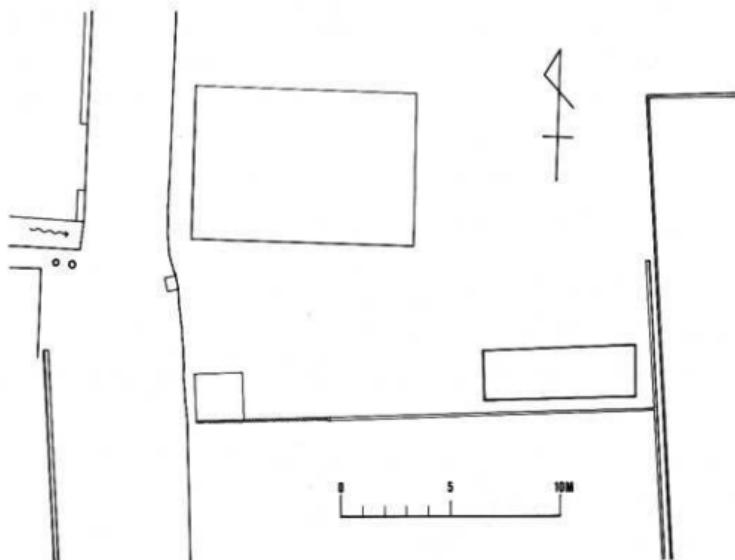
井浦由美・森本敦子・岡安雅彦・渡辺健彦・高井千尋・田中英行・片岡慶子・北村太賀子・西村智子・川端千晶・川村麻理子・佐野祐子・前田淳。

2. 調査経過

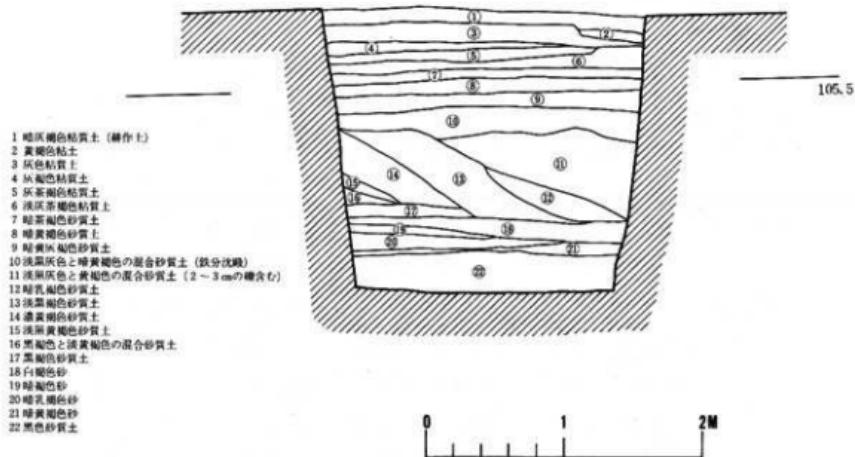
発掘調査は7m×2.4mのトレンチを、バックホーによって掘削した。約80~90cm掘り下げたところで、黄褐色砂と暗茶褐色砂質土の切り合った面が出現した。しかし



第16図 調査位置図



第17図 トレンチ配置図



第18図 トレンチ断面図

どちらにも遺物が認められないため、さらに掘り下げを続け、合わせて断面を確認したところ北から南へ強く傾斜した層であることがわかった。その上・下の層は、ほぼ水平に堆積していることから、この傾斜層は整地された際に北から南へ向って土砂を運び入れたものであろうと思われる。いずれの層からも遺物の出土はなく、わずかに傾斜層の下層から少量の土器片が出土している。

3. 遺 物

中・下層より古墳～平安時代の遺物が出土している。

中層出土遺物（第19図）

須恵器杯身(1) 口径が小さくなり、蓋と身の区別がつきにくくなる7世紀中頃のものである。

灰釉瓶(2) 底部のみの破片である。高台は丸味のある台形を呈して貼り付けられている。口縁部内面に釉が施されている。

下層出土遺物（第19図）

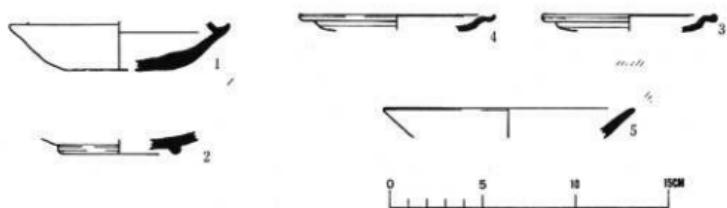
須恵器杯身(5) 生焼けのため、赤褐色をしている。浅く聞く形態を呈する。

土師器皿（3・4）ともに「て」の字状口縁を呈するもので、ともに器壁は薄い。3は4に比べて端部の巻き込みが強い。10世紀頃のものであろう。

4. ま と め

約2m掘り下げられたトレンチからは、遺構は検出できなかった。また、遺物も傾斜層の下層から平安時代の土器が少量発見されたのみであり、そのいずれもが実測不可能な小片であった。

本調査地は、昭和50年度に同敷地内の西側が調査されたのを始めとして、北側を除く全てが数年の間に発掘調査されている。特に、報告書の出されている南東の地区では、本調査地に最も近い西端の第四トレンチから、旧長蓮寺のものと思われる石垣の南東隅が検出されている。石垣の南東隅から、北へ約30m、西へ約20mの地点に本(注1)調査地のトレンチが設定されており、旧長蓮寺関係の遺構が発見される期待も秘めていた。しかも、石垣のレベルは102.8mであるのに対し、本調査地は104.0mまでしか下がっていない。しかし、以下の上層を一部深掘りして確認したところ、全く人手の



第19図 出土遺物実測図



第20図 トレンチ全景

加わっていない層であることが判明した。

当地は、西から東に向って傾斜しているのに加えて、断面図にも示されているように、北から南への傾斜も強く、現在の長蓮寺を建てる時の発掘調査でも南側が大きく落ち込むことが確認されている。

本トレンチの断面に現われたこの傾斜も、その落ち込みであろうことは疑いがなさそうである。特に、この傾斜層は、人為的に埋められた形跡があり、ある時期にこの地に土砂を運び込んで整地した後に、寺域に利用したものであろう。

(三宅 弘)

注1. 大津市教育委員会(「錦織遺跡発掘調査報告書」)Ⅱ一大津市皇子ガ丘地区住宅改良事業に伴う一)『大津市埋蔵文化財調査報告書』(7)昭和58年。

V. 59-4 地点の調査

1. 調査に至る経過

本調査地は、国道161号線の西大津バイパスの東に接した所で、山中越えの道とバイパスが接近した地点にある。昭和59年度に、白子久雄氏の所有地に車庫建設が計画され、それに伴う現状変更の必要性が生じてきた。

当地は樟木原遺跡の東～南東に接し、南滋賀廃寺の寺域の西を限る築地堀の南に位置する。

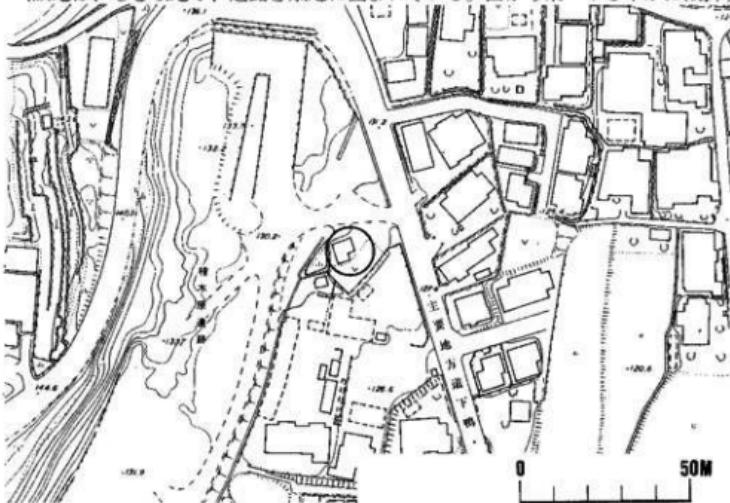
発掘調査は昭和59年11月30日から昭和59年12月6日まで行われた。

現地調査および報告書作成にあたって、以下の方々の協力を得た。

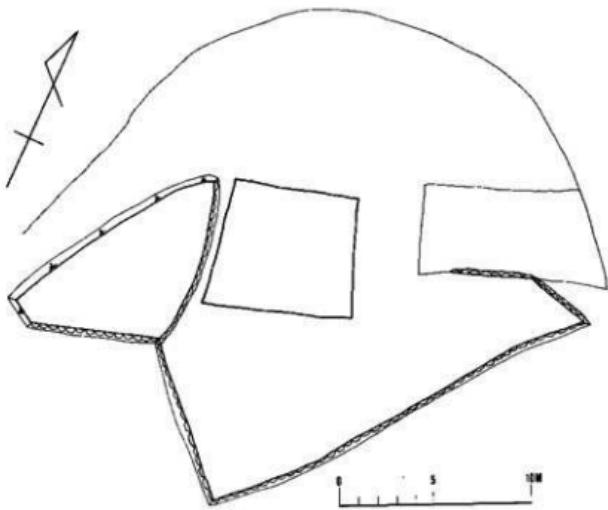
井浦由美・森本敦子・渡辺健彦・前田淳・田中英行・山口忠彦・高井千尋・馬場真理子・佐野祐子・川村麻理子・川端千晶。

2. 調査経過

当該地は、もと空地で、道路と畠地に囲まれている。西から東へゆるやかに傾斜す



第21図 調査位置図



第22図 トレンチ配置図

る花崗岩バイラン土層に、暗茶褐色や黒褐色の砂質土が堆積して遺構面を形成しているため、それらに注意して調査を進めた。バックホーによって東西約8m、南北約7.5mのトレンチを設定し、約1.8m掘り下げたところで、第1遺構面が現われた。以降、人力による精査ののち、土壌1基と11個のピットが確認された。また、第1遺構面から約0.4m掘り下げたところ、黄褐色砂礫層上に第2遺構面を検出した。第2遺構面は中央に南北流する形状の溝が1条検出された。

遺物は、土壌、ピット、溝等から少量の土器が出土している。

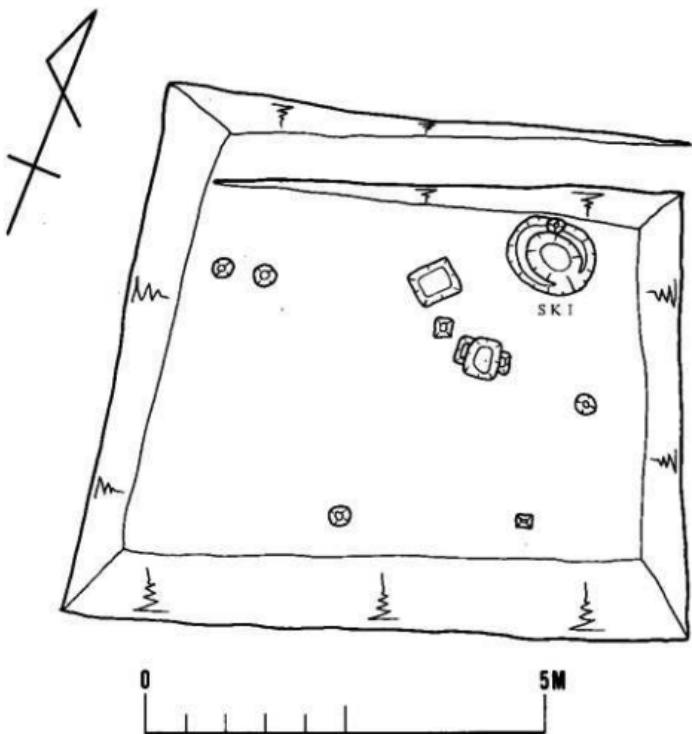
3. 遺 構

上層遺構面（第23図）

土壌（SK1）

トレンチの北西隅で検出された。二重になっており、外側の直径約1m、内側の直径約0.7mの円形を呈し、0.2mの深さを測る。

遺物は古墳時代の土師器・須恵器が出土しているが、いずれも小片のため図示でき



第23図 上層遺構実測図

なかった。

ピット

トレンチ内の各所に散在して検出された。方形のものは1辺約0.5m、円形のものは直径0.2~0.3mを測る。深さはいずれも0.2~0.3mであった。

遺物は須恵器の小片が若干出土している。

下層遺物面（第24図）

溝（S D 1）

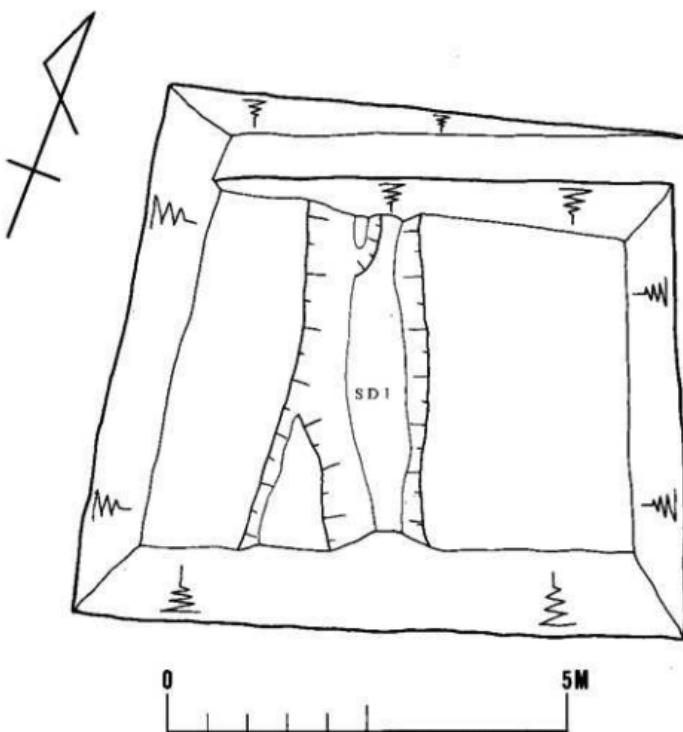
トレンチ中央を南北に流れる形状を呈して検出された。両端は調査地外のため不明

であるが、長さ4.5m以上、幅1.5~2.3m、深さは南端で約0.7mを測る。平面形は南に向って少し開きぎみにのび、北端では底面が約0.1m低く、南端では右岸が約0.2m下がって幅0.9mのテラスを形成している。

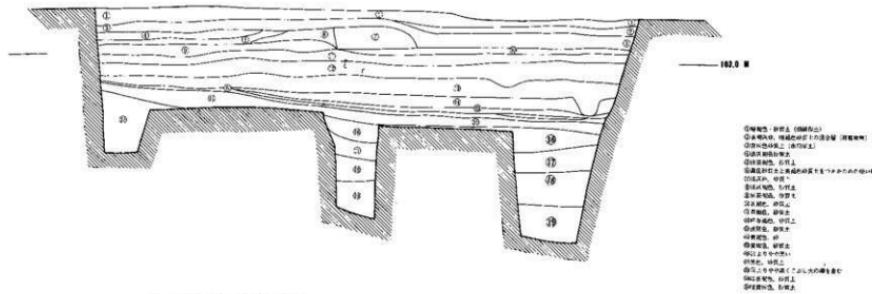
遺物は弥生土器の小片が出土しているが、図示できなかった。

4. 遺 物

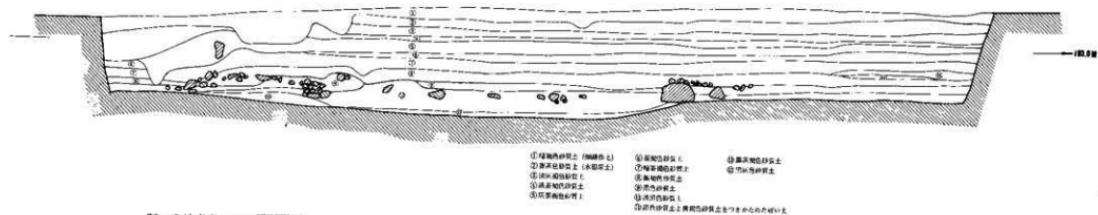
上・下層の遺構面から少量の須恵器・土師器・弥生土器が出土しているが、いずれも小片で図示し得るものはなかった。



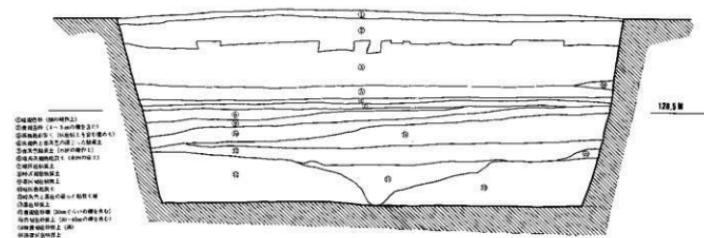
第24図 下層遺構実測図



59-2 地点トレンチ北断面図



59-2 地点トレンチ西断面図



59-4 地点トレンチ南断面図

第25図 トレンチ断面図

5. ま　と　め

本調査地では、上層に土壤とピット群、下層からは南北流する溝が検出された。当地の西から北西にかけて存在する桜木原遺跡は、弥生～古墳時代の住居跡と白鳳～平安時代の瓦窯跡や工房が検出され、また約100m北東に伽藍配置の中心を持つ南滋賀廃寺が存在する。南滋賀町廃寺は、寺域の西端にあたると考えられる築地塀が検出されている。本調査地は築地塀のほぼ南に当たっているため、築地塀の続きもしくはそれに付随する雨落ち溝などが検出されるのではないかと考えた。しかし、築地塀と当地の表土の高さの差が1.2mもあるため、すでに削平されてしまった可能性が高い。また、桜木原遺跡に関連した遺構や遺物が発見されるかとも思われたが、それらも検出できなかった。しかも、調査面積が狭いため、下層のSD1などはその性格が十分に把握できなかった。今後、この周辺が再び広域に調査される時が来れば、SD1の性格も解明されるものと信じている。

(三宅 弘)

VII. おわりに

59年度の調査のうち、錦織遺跡で3ヶ所、南滋賀遺跡で1ヶ所、計4ヶ所の概要を報告した。特に改めて総括するまでもないが、大津宮や、南滋賀町廃寺にかかる遺構の検出はなかったものの、それに前後する、弥生時代や平安時代の遺構・遺物の出土があり、この地域の重要性が、確認されることになった。特に弥生時代の遺構・遺物は、近江最古の皇子山1号前方後方墳の出現を準備した勢力の実態を考える上で、今後さらに追究していく必要があるし、平安時代、特に瓦の出土で知られる三井寺寺院尊勝院跡の解明は、近江における天台宗の展開を考える上で、重要な意義をもつものと言える。柿本人麻呂の「近江荒都を過ぎし時」の作歌にあるように、近江大津宮の栄華は、一夏の夢にすぎなかつたが、この地に居住する人々の生活は、その前後に當々と存続していたのであって、その解明は、当然今日に生きる我々の義務であろう。

(大橋信弥)

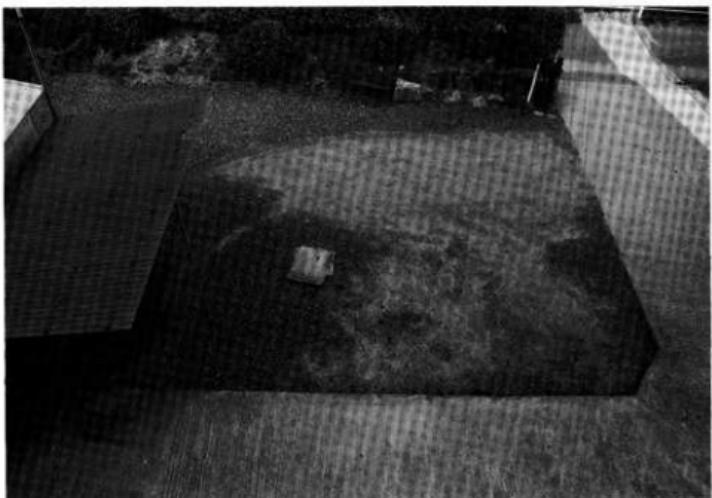
図 版



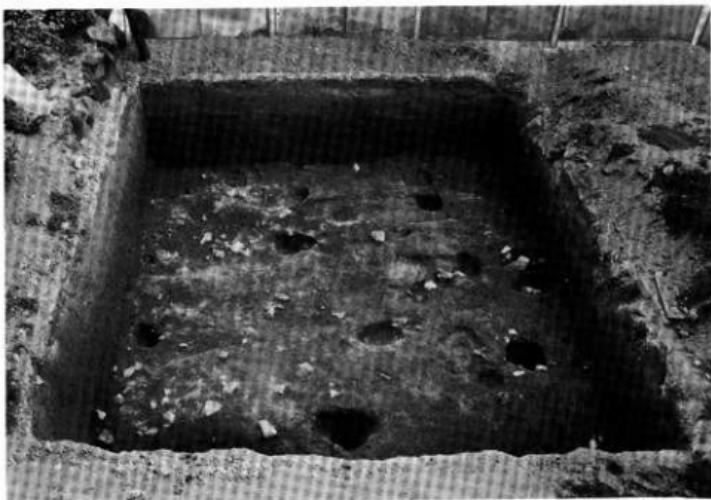
南滋賀遺跡全景



錦織遺跡全景



59-1 地点 調査前全景



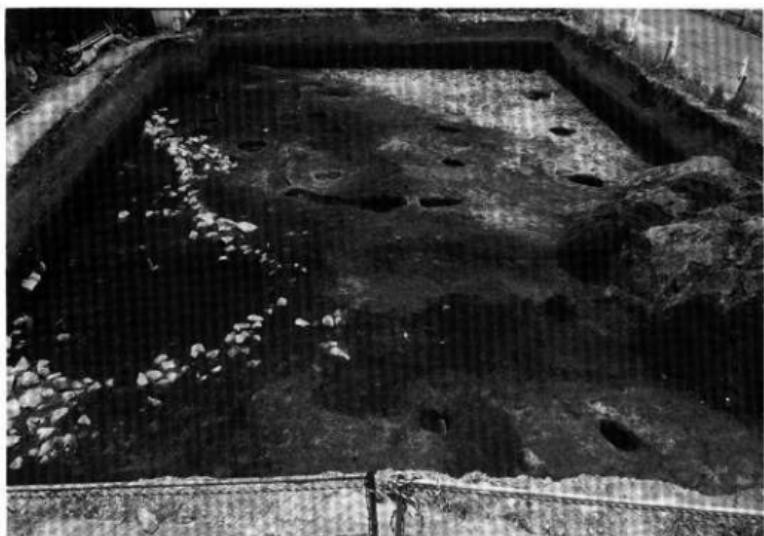
59-1 地点 トレンチ全景（第一遺構面）



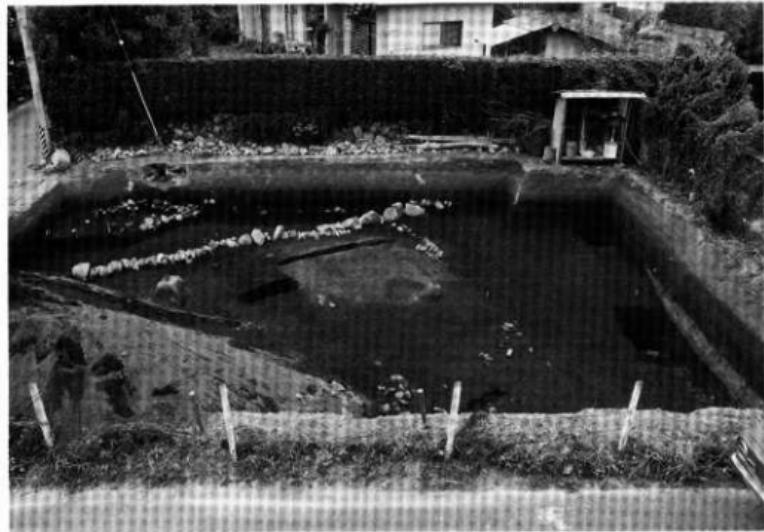
59-1 土層東面壁堆積狀況



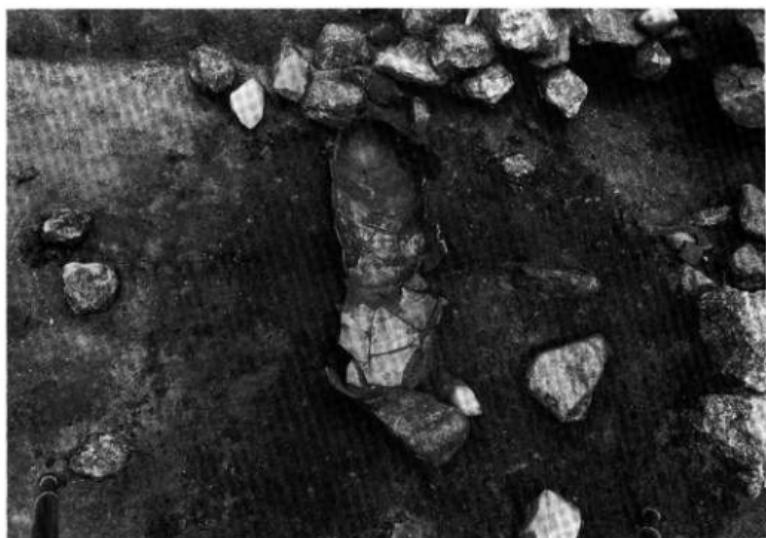
59-1 地點 出土遺物（左・第二遺構面、右・第一遺構面）



59—2 地点 上層遺構面



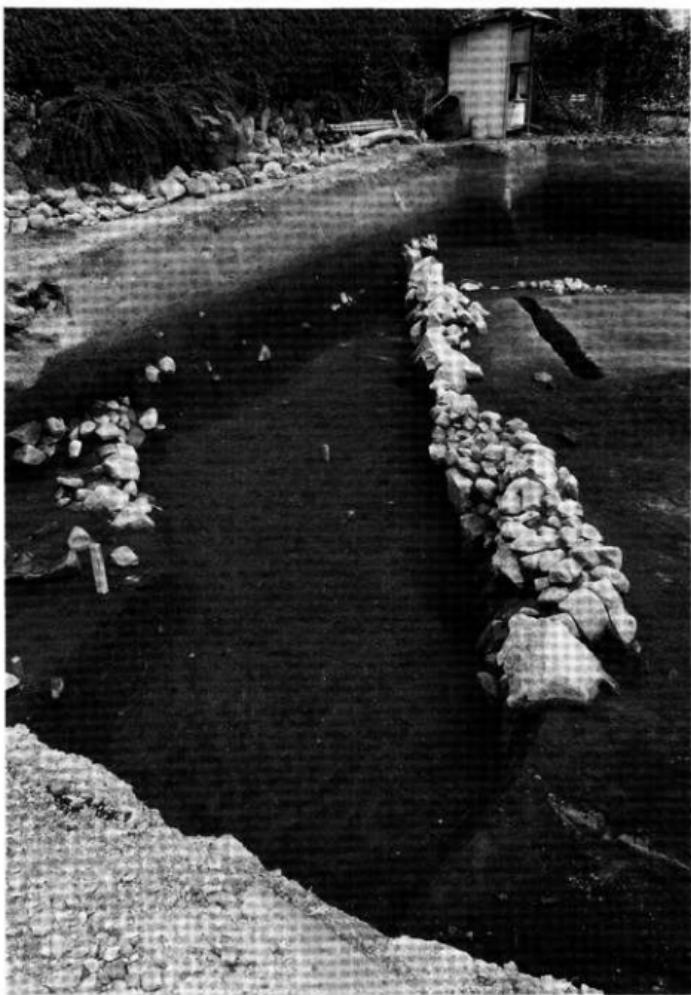
59—2 地点 下層遺構面



59—2 地点 合わせ口甕棺出土状況（東から）



59—2 地点 合わせ口甕棺出土状況（西から）



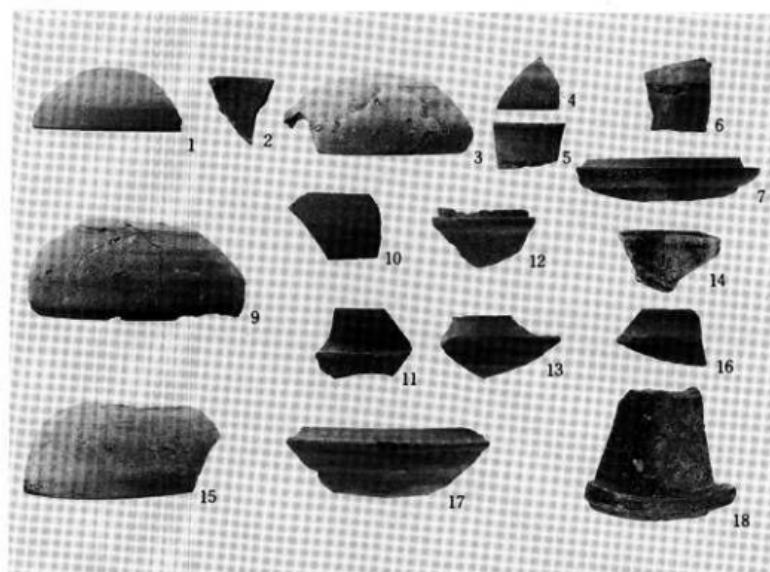
59—2 地点 池状遺構



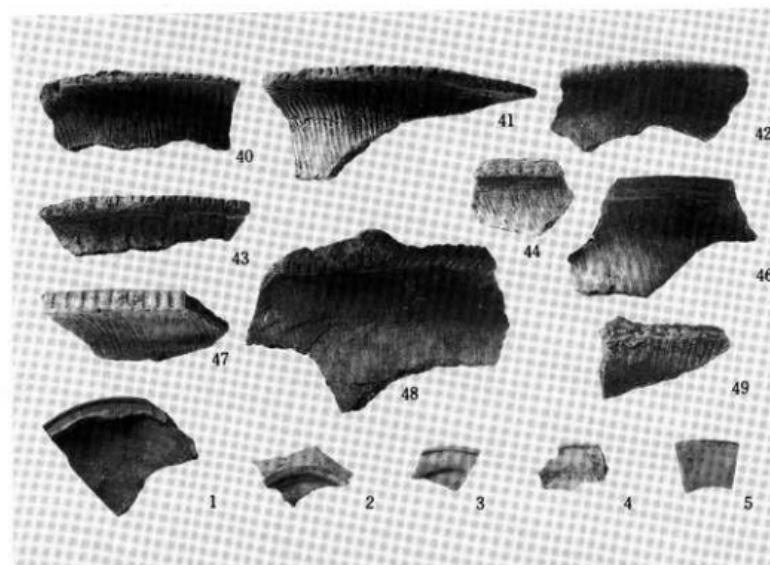
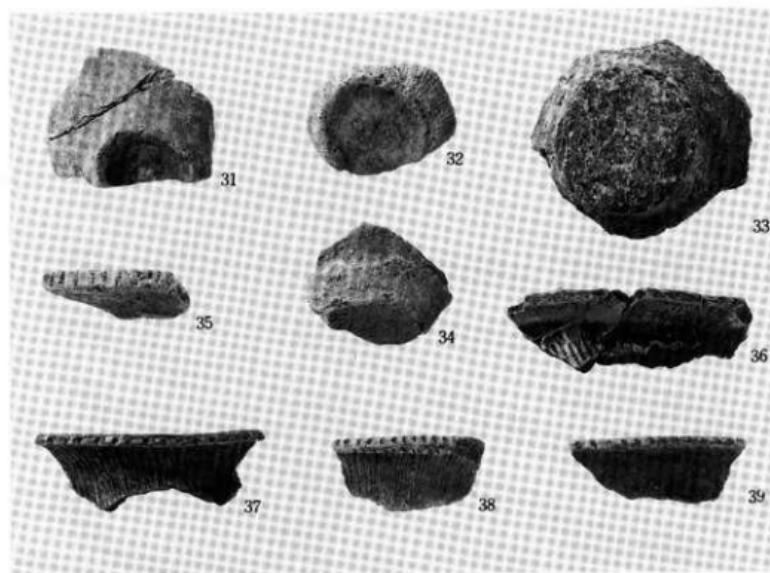
59—4 地點 上層遺構面



59—4 地點 下層遺構面



59—2 地點 出土遺物



59—2 地點 出土遺物 31~49

59—3 地點 出土遺物 1~5



51



50



8

59—2 地點 出土遺物

刊行年月 昭和 61 年 3 月

刊行物名 錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要 I

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大津市京町四丁目 1-1

電話 0775-24-1121 内線 2536

(財) 滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町 1732-2

電話 0775-48-9781

印刷・製本 (株) 同朋舎